

平野大臣のITERご視察に関するラ・プロバンス紙の記事概要（仮訳）（2012年7月31日付け）

（一面見出し）平野大臣、本島機構長とともにトカマクピットご視察中の写真における白抜き  
の見出し及び記事

「日本的スタイルとなったITER，平野博文文科大臣がITERを訪問。各メンバーがそれ  
ぞれの約束を果たす必要性を喚起する機会となった。」



（三面見出し）ITERが日本のお手本か、オリンピック開会式の翌日、日本の科学大臣がカ  
ダラッシュのITERに立ち寄られた。

平野博文氏は、文部科学大臣であり、有名なMEXTという省で、その大きさや範囲は、その  
人柄の大きさを示しているといえる。ITERに到着した数分後、既にその威厳が確かめられ  
た。本島修理事長は、ITERの日本人職員と同じく、待ちかねた様子であった。大臣がサイ  
トを訪問する際は、何時も一つの出来事である。更にそれが日本の大臣となれば、である。公  
式かつ計画的に準備された到着である。理事長、CEA所長マジエール氏との握手ののち、日  
本国旗の下で写真撮影となる。格調はこれで決まり、威厳と象徴の中で、訪問は限りなく公式  
かつ尽くされたものとなる。

仮設本部棟の入り口ホールのとカマクの模型の前で、理事長が装置の詳細について説明。ヘル  
メット、防護着、靴を急いで着る間、一行は既にバスに乗り込んでいた。PFコイル棟へ向か

う。特別な場所で、サイト内で最も大きく、滅多に入れない。トカマクで最も大きい装置が作られる。他で製作していたのでは輸送できないからである。うっとりしている暇は無く、バスはサイトの中心へ向かう。ゲリーニ議長が来て数週間後、日本の大臣がここトカマクの将来の中心部に降り立つ。

最初の様子は意味に富んでいて、そして 2011 年 3 月 11 日のことに必然的に触れた。長い沈黙の後、大臣は、耐震パッドの高分子物質になぜて、調べるように触れた。その後は慎重すぎるというわけには行かないでしょう。しきたりで中央のパッドに大臣の記念碑を置くこととなる。コンクリート上で署名、そして握手と記念撮影。バスは将来の本部ビルへ。リズムは早く、訪問は正確に行われていく。将来の講堂は殆ど完成し、幾つかのオフィスは既に出来上がっている。5 階では理事会の会議室が美しく、広々とした様子を示している。外には、一方にさえぎるものも無い見晴らしがカダラッシュの森の上に広がり、反対にはデュランス川の溪谷。そこで新たな写真撮影。他の人は工事現場全体が見える見晴らしの良いところへ。平野大臣、本島理事長も景色を堪能している。大臣は明らかに強い印象を受けているようであった。しかし、大臣はプロジェクトの重大な使命を見失うことは無かった。インタビューは、既になされた約束を尊重することが必至であることを想起する貴重な機会となった。

19 時 29 分、最後は、感謝の言葉と名詞交換に当てられた。その結果、大臣が到着してから正確に 2 時間は経って車に乗り込んだ。その国の正にイメージどおりの好例である。

(CEAカダラッシュ・マジエール所長)

所長は、フランス政府の名において大臣を歓迎し、CEA長官でありITER実現のフランス代表であるベルナール・ビゴー氏の名において表明された。フランスは、大臣が個人的に示されえているITERへの関心に喜びを感じており、フランスは、この国際的な大プロジェクトがスケジュールと予算を尊重しつつ成功するために行動し続けることを保障したいと発言。

(本島理事長)

大臣の訪問は実際にITERの建設の進展を知っていただく良い機会であり、核融合技術に対する大きな関心を表明し、安全性の利点、特に耐震防護による利点を表明する機械となった。同様に建設現場で日本政府の高いレベルでの支援を得ることはとても勇気つけられるものである。

平野文部科学大臣への三つの質問

Q：原子力が問題視されているときに、核融合は何を意味しますか。

A：エネルギー問題は、日本が対応していくべき重要な挑戦であり、この問題に対する我々の答えは国としての現在の行動に掛かっています。複数の答えが可能ではありますが、原子力は、再生可能エネルギーと同様の位置を占めます。今日、核融合はこれらの答えの一部であり、私は、推進すべき最も大きな方向の一つだと考えます。

Q：日本人の関心から見てどういうメッセージですか。

A：はい、エネルギー問題が決して一国のものではないとい観点を失わないことが重要ですが、安心できるメッセージを持ちます。地球規模の課題であり、国際的な挑戦であります。7つのメンバーが共同して答えを出すために協力することを決めたこともあり、その意味でITERは画期的なこととです。

Q：この種の研究に係わる期間の長さは特に制約にはなりませんか。

A：であるからこそ、各パートナーは同じ大きさの関心を共有し、共同して分担し、その約束を守っていくことが重要であります。2020年にファーストプラズマを予定通り達成できるのは、7つのメンバーの強い意志であります。それぞれがその約束を守ることが何よりも重要であります。日本はそれを実現し、本島先生にはプロジェクトで活躍して頂きたい。私ども政府はそれを実行します。またこの訪問の機会に、福島原子力発電所の事故時にフランス政府及びCEAの専門家が与えてくれたご支援に感謝したいと思います。